星の待つ丘

羽遊

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
星の待つ丘

【Ｎコード】
Ｎ４８８７Ｖ

【作者名】
羽遊

【あらすじ】
とある田舎から都会へと引っ越してきた中学３年の少年、狩主瑛人。
人と話すことを苦手とする彼が、星のよく見える丘でひょんなことから知り合った少女と仲良くなっていく。不思議な日常を送る中で、彼は沢山の不思議な人々と出会い、今まで感じた事のない不思議な感情を知っていく。

プロローグ（前書き）

誤字・脱字がたくさんあるかもしれません。
ご了承ください。

プロローグ

誰にも、一番好きな場所というものがあるらしい。
僕の場合は、引っ越す前の故郷にあった、星の良く見える丘だった。三日前までは、あそこによく通っていたのにな。
今居る場所は学校の男子トイレの中。背後の窓からの夕日が、照明のついていない薄暗く臭い空間と、僕を囲む４人の男子生徒を照らしている。状況は、僕から見れば普通。部外者から見れば最悪だろう。なにせ、僕は虐められているのだから。
相手にするのが面倒だったので、しばらく口を閉ざしていたら思いっきり右頬を殴られた。その反動で掛けていた黒縁眼鏡が宙に舞う。あの眼鏡、いくらだったかな。殴られるの予想してたなら掛けてこなけりゃ良かったのに。僕よ。
虐められている最中でもそんなのんきな事を考えてしまうのは、慣れているからだろう。前の田舎の中学校でも虐められていた。その時は物を隠されたり教科書に落書きされたりと、直接的な虐めはなかったが。
そのほうがまだ助かる。人と話すのは苦手だし、面倒だ。そのせいで今みたいな状況に立たされているんだけどさ。
「今日はもういいか。帰ろうぜ」
先ほど僕を殴った男子生徒がそう号令をかけると、他の男子生徒も頷き、そそくさと帰っていってしまった。
そういえば、何故自分は虐められているのか。そんなこと、少し考えればわかる事だ。およそ人が不謹慎に思う態度を、僕がとっているからだろう。人の言葉を無視、とか。

男子生徒たちが出て行ってから数秒間を置いて、僕も男子トイレを出た。もう放課後だ。いつまでここには居られない。
顔の痣や学ランの傷を人に見られると面倒なので、早足で３年１

組へ向かう。鞄を取りに行くためだ。学校に置いていくとまた教科書などを探さなければいけない羽目になるからな。

扉を横へ開けると、教室にはまだ女子生徒が一人残っていた。こちらに背を向けているから僕にはまだ気づいていないみたいだが……あの漁られている鞄、僕のだろ。窓際の後ろから2番目の席は……うん、やっぱ僕の机だね。はは。

「何かおもしろいものでも入ってた？」

自分の声にしては少々低めの音程で声をかけてみる。あいつも苛めで僕の鞄を漁っているんだろうなと脳内でほぼ確定していたから、なんか怒った感じに言ってしまったかもしれない。

女子生徒は腰まで長い黒髪をビクッと痙攣したように震わせ、恐る恐るこちらに振り向く。そしてその瞳が僕を捉えた瞬間、女子生徒は目を見開き、固まった。

「あっ……いやっ、カリス君……これはっ……すいません！」

その言葉を全て発し終える前に、彼女は逃げるように走り出していた。いや、追わないから。

僕は女子生徒の居た場所に立ち、自分の机の鞄を見下ろす。

「ついに、男子だけじゃなく女子にも悪戯を仕掛けられたか。万国共通の虐めの的だな、僕は」

そう笑い飛ばし、鞄のチャックを閉め、背中に担ぐ。と、そこで机の上のある異変に気づく。

「ああ、消しくずか」

散乱する消しゴムの消しくず。これ、あの子がやったのか？

机の上を軽く手の甲で払って、消しくずを落とす。あの子も地味な事するなぁと苦笑いし、僕は教室を出た。

さっき鞄も漁ってたから、もしかしたら教科書とかも落書きされてるかもな。

そう頭に浮かび、一言呟いた。

「前と変わんないな、ここも」

その言葉が全くの嘘になるとは、思いもよらなかった。

プロローグ（後書き）

あんまり自信がなく、文も下手ですが、どうぞよろしくお願いします＾＾

1話、狩主家

僕には家族と呼べる人がろくにいない。
それもそのはず、この引越しは母の事故死によって決まったのだから。

狩主家は僕、僕の父、母によって構成されていた。その主導権を握っていた気の強い母が、車に撥ねられて、帰らぬ人となってしまったのだ。よって、家族の主導権は真面目で温厚な仕事大好きの父に託された。
それを期に、父は実家の田舎から通勤先の会社があるこの町へと、引越しを決めたのだ。わざわざ遠い場所から3時間もかけて通勤する必要が無くなったからな。
僕は、今では故郷となるその村が好きだった。都会のような喧騒がなく、自然が多い。そしてなにより、僕の大好きな場所がそこにはある。とてもこの村を離れる気にはなれなかった。父になんて言われ様とも。そう思っていたのに。
あっさりと、引越しを承諾してしまったのだ。その話をしている最中、涙を見せない父が、母の死によって号泣していたからだ。

「あれだけ自分は冷めた性格の持ち主だと思っていたのにな……」
住処となる部屋の扉を前にしてつぶやく。僕なりの「冷めた性格」の解釈は、「誰にも己の感情の抑揚を見せず、家族の情けであっても同情の念は持たない」というものだった。つまり、一、匹狼を気取りきるということだろう。今の僕がそうだ。心の芯では母の様に気さくで、父の様に優しい人間になりたいと思っているくせに、昔のある事件をきっかけで、人と話すのが苦手になってしまった。
そして時が経つにつれ、人と話すのが「苦手」だけじゃなく、「

面倒」というのも追加された。その結果、残念な僕の出来上がりだ。

アパート二階、右から6番目の扉に「２０６」と記された金属のプレートが釘打ちされている。そこが今の狩主家の住処。父はこちらに来てからも毎朝7時前に家を出て、夜１１時に帰ってくるというハードなスケジュールをおくっている。夜勤で家に帰ってこない日も度々ある。

だから、引っ越してきてからの2日間。これからもだろうが、ほぼ一人暮らしの状況だ。

今日も多分徹夜で帰ってこないだろう。そう予測しながら僕は扉の鍵を開錠し、中へ入る。縦に３ｍほどの廊下には、玄関の付近にキッチンと冷蔵庫があり、正面に見て右にユニットバスと洗濯機、奥に6畳ほどの部屋へと続く扉がある。特に今のところはキッチンにもユニットバスにも用はないので、迷わず真っ直ぐ奥の部屋に足を踏み入れる。

今だ僕は部屋を放置しっぱなしだったので、必要最低限となる机と時計、それと寝具しかだされていなかった。それ以外の床はダンボールで埋め尽くされている。

「さて、じゃあさっそく鞄の中を拝見しようか」

僕はダンボールの上に腰を下ろして、背中の鞄を手に持つと、チャックを開けて思いっきり逆さまにした。教材やノートは重力に逆らえず、下に向かって次々と落ちていき、床にぶつかり鈍い音を立てた。

軽くなった鞄を脇に置いて、一冊の教材を手に取る。国語の教科書だ。だが、見たところどこにも落書きの形跡はない。中をパラパラと捲るが、破かれたページもない。

なんだ、これにはやってないのか。と少し安心して、次の冊子を手に取る。国語の教科書ときたら、

やはりノートだ。手に取って、先程同様に表紙を見たり、ページを捲ったりする。が、これまた先程同様で、どこにも悪戯の形跡がない。

まぁ、人の所有物を全部悪戯なんて大変だしな。数冊は見逃しているんだろう。

国語のノートを床に伏せ、教科書とノートの山からまた一冊手に取る。

が、ついに今回は先程と本体の状態が違った。手に持つは英語の練習用ノート。その表紙には、明らかに人為的な悪戯の証拠として、消しくずがたくさん張り付いていた。

これは、さっきの女子生徒の……？

何気なくノートをひっくり返し裏を見て、そこで僕は眉を寄せた。落書きだ。ゴジラの様な姿の、3歳児が描きそうな絵。が、僕が不信に思ったのはそこではない。

その落書きが、いかにも後から消しゴムで消された様に、半分だけしか残っていなかったのだ。しかも、その落書きの付近に消しくずがついている。

「もしかして、あの女子生徒は……」

何かに違和感を覚えたその時。ふと目に入った山のように重なる教材と教材の間に、青色の紙のようなものが挟まっている事に気がついた。それに手を伸ばし、強めに引き抜く。

現れ出たのは、涼しげな青色をした、俗に言う手紙というものだった。

2話、今井　満月（前書き）

主要人物

・狩主（カリス）　瑛人（エイト）

・今井（イマイ）　満月（ミヅキ）

2話、今井　満月

「手紙……だよな」
間違いないだろう。青色の、横に長い長方形の封筒。宛名は書いていないが、光に透かすと中の便箋がはっきりと見える。
転入早々、一目惚れで僕に恋文を送る馬鹿はいないだろうから、きっと悪戯だろう。でも、中身を見といて損はない。多分。
慣れない手つきで封筒の中から二つ折りの便箋を取り出し、開いてみる。するとそこには、

『初めまして。私は如月中学校の三年一組、今井　満月と申します。
唐突ですが、あなたに案内したい場所がありますので、
もしこの後用事がないのでしたら、
サンラフォーレ如月、２０５号室までお越しください。
お待ちしております』

と記されてあった。いや、本当に唐突だな。
如月中学校三年一組。つまり、僕のクラスメイト。だが、今井満月などという名前はまったく聞き覚えがなかった。そもそも、満月ってどう読めばいいのか。まんげつ？
それと、このサンラフォーレ如月というのは、狩主家の住むアパートの名前だ。つまり、２０５号室というのは、ここ、２０６号室のお隣さま。
おそらくそこに、この手紙の送り主、今井がいるのだろう。その今井が、ここへ来いと言っている。
どうせすぐそこだ。行くだけ行ってみるか、と僕はダンボール箱から腰を上げ、玄関に向かった。男子生徒の悪戯という線も考えられなくはないが、それだったら思いっきり殴られればいい。今更どうってことないからな。

玄関の扉を開け、４月のややひんやりとした空気に包まれる。右隣の部屋の扉には、確かに「２０５」と記されたプレートが見える。ここで間違いないと思うが、違ってたら恥ずかしいな。
少し躊躇いがちに、僕は２０５号室のドアチャイムを鳴らした。
ピーンポーン……
待つこと二十秒。部屋の主は姿を現さない。
……あれ？まさか、本当に部屋を間違えた？いや、でもここ以外にサンラフォーレ如月なんて……
と少し心配になりかけたところで、目の前の扉がそぉっと２０ｃｍほど開かれる。その隙間から、こちらを覗く瞳。
その瞳は、先程の三年一組で見覚えのある、黒髪ロングの少女のものだった。僕の鞄を漁っていた、女子生徒。ということは、おそらくこの女子が、今井　満月なのだろう。
「あっぁ……す、すいません。聞き間違いかなぁ……と、思って」
今井は挙動不信な様子で、扉をちゃんと開ける。
「こんな、早く来てくれるなんて……あっ、違いますよぉ！嫌味じゃないですっ！」
つっかえつっかえで、しかもゆったりな喋り方。
どうやら、今井も人と話す事を苦手とするらしい。……いや、これは僕以上では？
「あの、怪我、してるから……そのぉ、は、入って下さい！」
今井は体を玄関の入り口から逸らし、「どうぞ奥へ」と僕を促す。
いや、なんで？
怪我していると、何故その奥へ誘われなきゃいけないんだ。一体何するつもりだ、この人。
「どっ……どう、しましたぁ？」

「なんで？」
「えっ……？」
だめだ、言葉が足りなかった。
「なんで、中に入らないといけないんだ」
「それは、カリス君の……顔に痣、とかぁ、そのぉ……」
……あぁ、そういうこと。僕が顔中痣だらけだから、手当てしてくれるのか。
「いっ、いいからぁ……ね？」
僕は黙って頷くと、お言葉に甘えて２０５号室にお邪魔した。

部屋の構造自体は、全く２０６号室と変わりがない。が、雰囲気が全く違った。
まず、とても良い香りがする。香水の様なキツイ匂いではなく、女の子らしい甘いイメージの香り。
そして、廊下がとても綺麗。ホコリ一つ落ちていないし、キッチンのシンクもピカピカ。
そういえば、今まで女子の家にお呼ばれされたことないな、僕。悲しい男だな、お前は。

廊下を進み、奥のスライド式の扉を開ける。
あぁ、これが女子の部屋と言うものか。なにもかも、それっぽいな。
これが部屋に足を踏み込んでからの第一印象。ピンクや水色、黄色。主に僕の目に映る色はこの三色。部屋の中には、ベット、ソファ、その上にクッションやぬいぐるみたくさん、ＴＶ、短足の丸机。と、そこで丸机の上に大量の化粧品を発見する。
今井はそれを訝しげに見る僕に気づいて、
「ち、ちがうよぉ！おた、あたしのじゃなくてぇ、おねぇちゃんの……この部屋も、だから」

なるほど。この女の子な部屋はこの女子生徒の姉の趣味なのか。この化粧品の数を見ると、なんか化粧濃そうだな。……いや、この数でも普通なのだろうか。どうでもいいが。

僕はその化粧品がたくさん置いてある丸机の横にあぐらをかいて座り、今井は僕の真正面に正座して、隣に救急箱らしき取っ手の付いた白い箱を置いた。

「あぅ……わっ、言い忘れてましたぁ……あたしが、今井　満月ですぅ」

いや、分かってるから。というか、セーラー服着てる時点で分かるだろ。

それと、その名前まんげつじゃなくてみづきって呼ぶのか。

「さ、さっきの、教室の、あれはぁ……あたしじゃなくてぇ……あ、あたしですけど……うぅ～」

と、そこで今井がさっき教室であったことについて話そうとしていることに気づいた。

それについては、僕も今井に聞きたい事があったんだ。

「今井……さん。いとつ、聞いても良い？」

「え？あっぁ……どーぞぉ」

先程、英語の練習用ノートの落書きを見た際に、感じた違和感。

これは、あくまで予想だが。

「もしかして……えっと、僕の教科書とかノートの落書き……今井さんが、消してくれたのか？」

2話、今井　満月（後書き）

ちょっと長くなっちゃったかな？

3話、口下手が二人（前書き）

主要人物

・狩主（カリス）　瑛人（エイト）

・今井（イマイ）　満月（ミヅキ）

3話、口下手が二人

僕の口は、おもに好奇心を原動力として動く。
だからこの質問も、僕の好奇心を元になって口から出てきたのだろう。
「あっ……それはぁ……」
その質問に対して、今井は口篭る。
僕の英語の練習用ノート。あそこの裏に書かれていた、奇妙に上半身しか残っていなかったゴジラのような生き物の落書き。その付近に消しゴムのくず。落書きは鉛筆で書かれていたようだったから、消しゴムで消すことも可能。
今井が、男子生徒によって悪戯された僕のノートの落書きを、消しゴムで消していた。あの教室で。
でもそう考えると一つ、引っかかる事がある。なぜ今井は、その行動に至ったのか、ということだ。

「……はぃ、あたしですぅ」
今井はずいぶん間を空けた後、そう述べた。
「あの時は、そのぉ、逃げて……すいませんでしたぁ」
全くだ。僕が声をかけた時の今井の反応は、悪戯が見つかったときの子供のそれと同じだった。あんな行動とられたら、普通は悪戯されていたとか思うだろう。
「そのことは……いい。じゃあ、さ、なんで僕の所有物の落書きを、消してくれたんだ？」
あまり上手くまわらない口で、問いかける。
すると今井は斜め下を見たまま、
「て、手紙。入れようと思ってぇ……あっ、カリス君の、鞄に。それでぇ、その、勝手に鞄の中……あ、ごめんなさいっ……鞄の中、見たらぁ、ノートとか、教科書、いっぱい落書き……されてて……」

いっぱい……って、あの机の消しくずの量を見ると、三冊四冊どころの話じゃないぞ。ほぼ全部落書きされてたんじゃないか？
英語の練習用ノートを見た後、さっと他の教材やノートも見たが、落書きは一つも見つからなかった。つまり、最後一冊となった練習用ノートの落書きを消していたところで、僕がボコボコにされて教室に帰ってきたって訳か。
「落書き……誰にされたのかぁ、分からなかった、けどぉ……可哀そう、と思って……その、勝手に消しちゃ、まずかった……ですか？」
何故そうなる。悪意のある落書きを人に消されて怒る阿呆はいないだろ。
ここは、素直にいきたいが……
「別に、け、消さなくても、良かったのに……」
こう、思い通りにならないのが僕なんだ。思った事と反対のことが口を滑る。
「あぅ……すいません」
ほら、今井見るからに落ち込んじゃったじゃないか。
そこから少々気まずい空気が流れ、二人とも何も話さない。

そのまま約3分経過。ってどんだけ口下手なんだよ、僕たちは！と、僕はふと考えた。何故、僕はこの部屋に招かれたのだろうか。
自然と視線が今井の隣の、白い箱へと移る。
今井も僕の視線に乗って、終電となる白い箱へと目をやる。そこで彼女は目を見開き、なにかを思い出したような大げさな素振りで、
「あっ！手当て忘れてましたぁ……」
とつぶやいた。
……僕も忘れてたよ。まず、そもそも顔にあまり痛みはないんだ。主に痛むのは、わき腹のあたり。
細くてヒョロヒョロした出で立ちの男子生徒だったが、蹴りは蹴りだ。あいつがしきりに僕に罵倒の言葉を浴びせてきたので、思いっ

きり顔を殴ってやったら、あちらはそれを本気の蹴りで返してきた。
お陰で、昨日からズキズキしっぱなしだ。
そんな僕の症状に気づくことなく、今井は白い箱の蓋を開け、中から消毒液とガーゼ、絆創膏をいくつか取り出した。
自分では気が付かなかったが、どうやら顔には痣だけではなく、血が出ている箇所があったらしい。
彼女は慣れた手つきでガーゼに消毒液を染み込ませ、トントンと僕の顔の傷を優しく叩いた。
真正面には心配そうな表情の女子。実際こうやって見ると、一般男子から見れば今井はかわいい方だろう。
目はその性格と比例し、優しそうな垂れ目。鼻は少し低めで、唇は桃色。下へ流れる黒髪が、大和撫子の雰囲気を醸し出している。その黒髪の中で光を湛えるのが、美しく白い肌。
体系も別段悪くないだろう。一般の女子より足が細めで長い。それでいて身長は１６０ｃｍぐらい。
……待て、狩主　瑛人よ。何故おぬしは女子の格付けを勝手にしておるのだ。
と、そこで我に返ると、どうやら今井は男子に直視されるのに耐え切れなくなり、顔を真っ赤にして斜め下を向いていた。
「あのぅ……な、なんですかぁ……？」
「いっ、いや、悪い……」
僕も自分の顔がどんどん熱くなっていくのを感じていた。なんだこれは。こんなラブコメの様な展開、誰も望んでいないぞ。
しばらく恥ずかしさを誤魔化すため目を瞑って待っていると、暗闇の先から「お、終わりましたぁ」と気弱な声が聞こえてきた。
目を開けて、自分の顔に触れてみる。けっこう大袈裟に手当てがされているな。いつのまにか頭にも包帯巻かれているし。
と、礼を言おうと今井を見ると、こちらも何か僕にいいたい事が

あるのか、チラチラと僕の顔を見てきた。
「ひ、あ、あの……もしかして、その怪我ぁ……虐め、とか、ですか？」
そして、唐突にそんなことを聞いてきた今井。
「……そんなこと、お前に関係ないだろ」
この言葉は、僕の本心だ。そんなこと知ってどうする。万が一、僕を虐める男子生徒に今井が「虐めをするな」と言えば、きっと彼女も虐めを受けてしまうだろう。
「……でもぉ……」
が、今井もそこで下がらなかった。
「なんで、そんなこと聞きたがるんだ」
ここで僕の虐めについて聞いて、彼女に何か利益があるとは思えない。
「もっ……もしかしたらぁ、カリス君も……」
と、彼女は言いにくそうに視線を逸らしながら、こう言った。
「あたしと、同じなのかなぁ……て、思って」

同じ？……
しばし考えて、やっと気づいた。
「今井……虐めを受けているのか？」

3話、口下手が二人（後書き）

「虐め」という単語がよくでてきますが、物語自体は前向きなものなので、心配しないでくださいね。

4話、自転車（前書き）

主要人物

・狩主（かりす）　瑛人（えいと）

・今井（いまい）　満月（みづき）

4話、自転車

「あ……ぅ、はい……」
僕の質問に肯定の意を示す言葉。だが、それ以上今井は口を開こうとしなかった。
言いたくないのなら、無理して言わなくても良い。どうせ今の質問も僕の好奇心によるものなんだから。
今井は気まずそうに顔を伏せ、僕も次の言葉が見つからず、再び部屋が沈黙に支配される。
「……」
「……」
静かな部屋は好きだが、この部屋は別の意味で静か過ぎる。沈黙を打ち破らねば、とがらにもなく思ってしまう程だった。
「……で、案内したい場所ってどこ」
今になって思い出した事を口に出してみる。
「……あっ……そ、そうでしたねぇ……じゃ、行きます？」
違うって。どこ？って場所を聞いたんだよ。
僕がそう述べると、
「い……行ってからのお楽しみですっ！」
と今井は可愛らしく言ってみせた。……練習でもしたのだろうか。

今井に続き部屋を出ると、すでに景色は夜へと変貌していた。先程より肌寒くなった風が僕の首筋を撫で回し、通り過ぎてゆく。
無言で前を歩く今井の後ろにつき、僕もそのまま階段を降りて行った。歩いて5分ぐらいの場所を期待していたが、どうやらその予想はハズレらしい。自転車置き場へと向かっている事に気づいたからだ。
「カリス君は……あれ、自転車とか、って、持ってますかぁ？……」

控えめに後ろを振り返った今井。緊張気味な表情は変わらず。
自転車は故郷に置いてきた。学校なんて徒歩で5、6分程度だし、別に行くところも無いだろうから、持ってこなくてもいいと判断したのだ。
「ないけど」
ぶっきらぼうに答える僕。
「……じゃ、じゃぁ、二人乗りぃ……とか、します？」
とんでもない事を切り出す今井。ふ、二人乗り？
「歩いて行けないのか？」
出来れば二人乗りなんてしたくない。もし同級生の誰かに目撃されてしまったら、明日には噂になっているだろう。目立つのは……ごめんだ。
「歩いても、いい、けどぉ……そぅ、時間が、かかっちゃいますよぉ？」
「どのくらい」
今井は唇に指を押し当て、
「えと……2時間？3時間……いやぁ、4時間かも……」
ちらちらとこちらの様子を窺いながら言ってきた。
自分の自転車は無い。相手の自転車はある。だが二人乗りしたくない。だが自転車を使わないと時間がかかる……なんか面倒になってきたな。
「やっぱ僕、帰るから」
そう言い残して、今来た道を戻ろうと進行方向を転換する。
「ま、まぅ、待ってぇ！」
すると、後ろから大きな声で今井に呼び止められた。
「ぜったい、ぜったい、ぜったいぜったいぜったい……気に入るからぁ……お願い」
どこからそんな自信が湧いてくるのだろうか。もしかしていかがわしい店にでも連れて行かれるのでは……と少し考えたが、この今井の性格というか人格からして、それは有り得ないと判断した。

仕方なく振り返り、小さく頷いてみせる。
「もし、気に入らなかったら……怒るからな」
すると、今井はその言葉を本気だと思ったらしく、小刻みに震え始めた。
「や……お、おお、怒らないでぇ……」
……さっきまでの自信はどうした。

自転車置き場につくと、今井は所狭しと並んでいる自転車の行列から自分の自転車を引っ張り出し、道路の方へと車輪を転がしていく。
「かり……カリス君、後ろ、乗って」
今井はさぁ乗ってとサドルの後ろの席をぽんぽんと叩く。後ろって……どうだろうか、それは。
「僕、前に乗るから」
そう言ってサドルの上をぽんぽんと叩く。
その言葉に今井は虚を突かれたように目を見開き、僕の顔を覗き込んできた。
「カリス君、あの、眼鏡ないけどぉ……大丈夫？」
眼鏡……あぁ、あの眼鏡の事か。男子トイレに置いてきたままだった。
「あれ伊達眼鏡だから。ちょっと高かったけど」
買う時、なんで伊達なのにこんな高いんだろうって疑問に思ったなぁ。
「なんでぇ……その、伊達眼鏡なんか」
今井が自転車に視線を落としたまま聞いてくる。
人と顔をあわせるのが余程苦手なんだろう。僕もだけどさ。
「……昔の自分を、捨てたかったから。結局、無理だったけど」
僕はそこで話を切るべく、自転車のサドルに跨り、今井に「後ろに乗れ」と手で示す。

そこはさすが今井、と言ったところか。空気を読み、僕の過去をこれ以上探ろうとはしてこなかった。
自転車が微かに揺らぎ、今井が後ろから「じゃあ、道案内、するから」と囁くように言った。
それから今井は少しうなる様な声をだして、
「つ……か、つかまっても……おっけい？」
またもや控えめな声でそう確認してきた。おっけい、て。
「……勝手にどうぞ」
半ば投げやりになっている僕。
その僕の腰にそっと腕が回され、背中に人間のぬくもりとおもさを感じさせた。
なんで寄りかかってるんだよ、今井。
「……じゃ、行くぞ」
「うん……まずぅ、右」
ペダルに、足をかけた。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n4887v/

星の待つ丘

2011年8月21日03時18分発行